

第 54 回日本小児神経外科学会参会記

堺市立総合医療センター脳神経外科

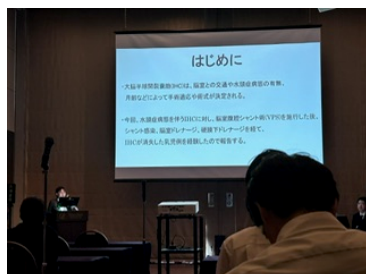
大木 奏舞

2026 年 6 月 5 日から 6 日にかけて鎌倉市で開催された日本小児神経外科学会に参加し、このたび初めて口頭発表という貴重な機会をいただきました。

私の発表演題は「脳室腹腔シャント術後の硬膜下水腫により大脳半球間裂嚢胞が消失した一例」でした。本症例は経過が長く病態も複雑であり、理解するまでには多くの時間を要しましたし、今なお十分に理解できたというには言い難い部分もあります。現在私は小児診療を行っていない病院で勤務しておりますが、成人診療の中でシャント術やシャント後の硬膜下水腫を経験する機会があり、日々の診療を通じて本症例の病態をより具体的にイメージしながら考えることができるようになりました。また、病態を考察するためには経験だけではなく、その基盤となる知識が不可欠であることを改めて実感しました。今回、多くの文献に目を通して知識を深め、その知見をもとに考察を組み立てていく過程は、今後の診療にも生かすことのできる大変貴重な学びとなりました。

日々の診療においても、手術手順や病態について自分自身の言葉で説明できるまで理解を深めることで、初めて具体的に手術をイメージし、実際の手技へとつなげることができると感じています。今回の発表においても、原稿を覚えるだけではなく、内容を自分の言葉で説明できるようになるまで繰り返し練習することで、一つひとつの病態や考察への理解がより深まりました。「自分の言葉で説明できるまで理解する」という姿勢を、今回の発表を通じて得た大切な学びの一つとして、今後の日々の診療にも生かしていきたいと思えます。

また、このような形で参会記を執筆する機会を与えていただけたことにも、ご縁を感じております。日々の診療の場はそれぞれ異なりますが、学会を通じて互いの経験や近況を共有し、多くの先生方と交流することで、自分自身が多くの刺激と力をいただきました。そのようなつながりが自分自身の成長につながり、ひいてはより良い医療を患者さんへ提供することにつながるのだと実感し、人とのつながりの大切さを改めて感じる機会となりました。



未熟な私に最後まで温かくご指導くださいました高槻病院の先生方、学会準備を多方面から支えてくださった堺市立総合医療センターの先生方、現在も変わらず温かく声をかけてくださる熊本大学病院の先生方、そしてこのように参会記を執筆する機会を与えてくださった牧野先生に心より御礼を申し上げます。